市民の消防団活動に対する印象と参加動機に関する研究

○粕川正光

(千葉科学大学 危機管理学部)

キーワード: 消防団活動、動機付け、地域防災

The impression and participation motivation of the volunteer fire department

Masamitsu Kasukawa

(Faculty of Risk and Crisis Management, Chiba Institute of Science.)

Key Words: volunteer fire department, motivation, disaster prevention

目 的

東日本大震災においては、自主防災組織である消防団のメンバーが、消防や自衛隊などとともに、水門閉鎖、避難誘導、避難所の運営支援、行方不明者の捜索などの、災害対応活動に従事し、大いに活躍した。近年では火山活動の活性化、風水害など、さまざまな災害の発生に関する関心の高まりなどもあり、地域の特性を熟知している市民によって交際されている消防団による、防災活動の重要性がますます重視されるようになってきている。

しかしその一方で、消防団活動は、全国的な傾向として、人数の減少化および高齢化してきており、十分な人数を確保することが困難な自治体も数多くみられる。近年、人々の職業のサラリーマン化や核家族化などが進行し、消防団の基盤ともいべき地域コミュニティそのものが全般的に衰退傾向にあることもあり、団員数の減少傾向が続いている。平成13年から平成25年にかけての12年間で、女性消防団員の人数は増加しているものの、消防団の全体人数は約7万人も減少している。

消防団の活動を活性化することは、災害発生時に市町村単位での地域防災能力を向上させるために非常に重要であると考えられる。本研究では、消防団活動の活性化、特に今後の防災の担い手たるべき若者の消防参加を促すための方法の検討を目的として、消防団活動の参加者（消防団のメンバー）、および参加経験の無い一般市民および大学生を対象として、消防団活動を活性化するために、消防団に対する印象および参加動機に対する検討を行った。

方 法

消防団活動未経験者群としては、消防団参加経験の無い一般市民および大学生 95 名を対象とし、消防団メンバー群としては、千葉県銚子市消防団員(団本部会議参加者および、一般市民のうち消防団活動経験を有すると回答した者)56 名を対象とした。調査参加者の合計は、合計 151 名であった。

すべての調査参加者に、消防団活動についての知識(消防団が地域イベントの警備を行っていることを知っているか、消防団員が全国的に減少していることを知っているかなど、9 項目; 知っている・知らないの 2 件法)、および消防団の印象(普段経験できない貴重な体験ができると思う、上下関係が厳しそう、地域の防災リーダーだと思ふ、など 20 項目; そう思うない~そうおもうの 5 件法)についての質問を行った。さらに、消防団活動がボランティア活動の一種であることから、援助規範意識(20 項目; 箱井・高木(1987))についての質問を行った。加えて、消防団の所属の有無によってそれぞれ異なる質問を行った。消防団メンバー群に対しては、消防団へ入団した動機についての質問(自分の役に立つと思ったから、活動している人に共感したからなど、17 項目; あてはまる~あてはまらないの 5 件法)を行った。未経験者群に対しては、

消防団活動への参加経験者は入団動機を、非所属者にたいしては、消防団活動への関心(3 件法)と、今後の入団意図(5 件法)についての質問を行った。

結 果

消防団参加者の、入団動機についての検討を年代別に行った。20 代の消防団参加者は、入団の動機として「自分の役に立ちそう」「活動が楽しそう」「自分の経験が生かせそう」など、自分の意思に基づく参加動機をあげた割合が高く見られた。一方、30 代、40 代と年齢が上がるに従い、「地域の習慣」「人間関係上やむを得ず」などの、自分の意思と異なる参加動機をあげる割合が上昇する傾向があった。ただし、それらの参加動機にかかわらず、「社会の役に立ちたい」と考えたことを参加動機にあげる割合は一貫して高い傾向が見られ、参加のきっかけが受動的なものであっても、活動そのものの意義は高く評価されていることが示された。

また、消防団活動未経験者群について、今後の入団意図の違いによる消防団の印象の違いについての比較を行った。その結果、消防団に「あまり入団したいと思わない」と回答した者の多くが、消防団の印象のうち、『人間関係が厳しい』『自由時間が拘束される』『活動が大変』などの、消防団活動についてネガティブな印象を示す項目が高い値を示す傾向が認められた。しかしながら、興味深い点として、入団意図が最も低い「全く入団したいと思わない」と回答した者が、消防団活動についての知識をほとんど持っていない傾向が認められた一方で、それよりやや低い入団意図を示した「あまり入団したいと思わない」と回答した者がむしろある程度消防団活動に関する正しい知識を持っている傾向が認められた。このことは、前者が消防団活動への関心が全くないために参加意図が無い一方で、後者が消防団活動についてある程度の知識を持った上で、ネガティブな印象のために、参加意図が低くなっていると解釈することができる。実際に、消防団参加者のそれらのネガティブ項目の値はそれほど高いものになっておらず、一般的なイメージと、実際の参加者の印象の間に相違が認められるという結果が得られた。

考 察

地域の防災力を向上させるためには、消防団活動の活性化は重要な課題である。本研究の結果は、若者の消防団活動への参加を促すための課題として、消防団活動につながるやりがいや重要性、他動的なきっかけであっても参加することによってやりがいや醸成されること、また消防団活動に対する知識をより周知することが重要である一方、ネガティブなイメージを払拭することが有効であると考えられる。今後、さらにこれらの具体的な方策についての検討を行うことが必要である。